

人も自然も共に生きる

ESD × 生物多様性しんぶん

2012年春・最終号

新潟県南魚沼市のごみ photo: 宮部浩司

このニュースレターは、ESD-Jが取り組む「ESD×生物多様性」プロジェクトのプロセスや成果をお伝えするために発行しています。

2009年から3年間取り組んできた「ESD×生物多様性」プロジェクトも、いよいよラストスパートに入りました。生物多様性を大切にしたい地域づくりと人づくりのモデル事業に取り組んできた3地域では、今年度の活動をふまえ、来年度の取組に向けた展開案を検討してきましたので、その内容をご紹介します。また裏面でお送りしてきました「震災復興に見るESD×生物多様性」では、東北大学のグリーン復興プロジェクトの目指すところをご紹介します。あの震災から1年、自然の力と、自然とともに暮らすことの意味を、多くの人が見つめ直したことと思います。生物多様性を大切にしたい地域づくりと人づくり、ESDとつなげて推進していきたいと思っています。

動物園から始める 生物多様性学習

とべ動物園・生物多様性プロジェクト

「動物園を生物多様性の学びの場に」、そんな目標を掲げてスタートしたプロジェクトでしたが、最後の研究会で取り入れてみたネイチャーゲームのワークショップから見てきたのは、動物園は「観察力」や「注意力」を培うのに格好の場所になりうるということでした。例えば「私はどんな動物?」という動物カードを洗濯ばさみで背中に留めて、Q&Aで言い当てていくゲームを学校の教室などで経験してから動物園に行くと、「タヌキ」になった子どもはタヌキを、「キツネ」になった子どもは実際のキツネをくまなく観察しようとするでしょう。また、「○や△などいろいろな図形を探してみよう」というゲームからは、動物の目や耳の形、毛の模様などをじっと注意深く観ている内に、いろいろな○△が見つかるでしょう。

こうした「観察」からその動物に対する「興味」が広がり、「どうしてこんな形をしているのだろうか?」「ここに来る前はどこで暮らしていたのだろうか?」「そこはどんなところだったのだろうか?」という「学び」につなげていく。世界の動物が文字通り「多様」にいる場所が動物園です。今後も、動物の絵本を活用したり、ネイチャーゲームを取り入れるなど事前学習と組み合わせながら、動物園でさまざまな生きものへの興味・関心を深めることができる教育プログラム作成に取り組んでいきます。



自然の中のいろいろな形

地域とともに 獣害を考える

岡崎市新香山中学校の取組

今年度、一年間、総合的な学習の時間で、地域の獣害について考えてきました。地域の自然状況を自らが調べてまとめたバイオリージョンマップ、地域の方を訪ねて調べた獣害被害調査など、調べてみて初めて分かったことがたくさんありました。まとめの授業では猟師さんを招いて獣害の詳しい状況とイノシシの生態について聞きました。温暖化の影響で、出産数が増加しているなどの話は驚きでした。

来年度は、一歩踏み込んで、新香山の里山をどうするべきか地域の方と話し合っ、行動することができたらと考えています。この地域の里山で、イノシシやサルたちと共存するにはどうしたらいいか。裾刈りなどの里山整備をするとともに、適正数を検討し、イノシシの資源としての有効利用も考えなければなりません。そのためには専門家を巻き込むことも必要になってきます。

更に、獣害という面だけでなく、もっと総合的に里山について理解を深めることも重要というアドバイスをいただきました。例えば、里山整備で出た間伐材を利用して、炭焼きをすとか、できた炭を七輪で火をおこし、料理するなど、循環型のライフスタイルも考えることができたらと思います。

地域 みんなで新香山の持続可能な里山づくりを行っていくことが我々の大きな目標です。



猟師さんのお話を聞く

高齢社会のモデルとしての 地域支援型農業確立へ

高島平一子棚田交流プロジェクト

◆城西国際大も参画し三者連携がスタート

2月23日、高島平から5名、二子棚田保存会から2名が参加し、城西国際大学と二子棚田現地で第4回の交流会が行われました。

同大の鴨川キャンパスは二子棚田の麓に位置し観光学部があって、ニューツーリズムを学ぶ学生たちが、地域をフィールドに実践的に企画運営力を学んでいます。

同大を活用しての交流のアイデアがたくさん出されましたので、いくつか紹介しましょう。

- ・「棚田シンポ」・・・農業、民俗、文化、暮らし、交流、生物多様性、環境、観光など棚田の価値を多角的に検討し発信する
- ・「鴨川七輪火祭り」・・・七輪の野焼きと炭焼きを組合せ七輪の使い方を教える

◆オーナー募集、棚田の耕作から活動開始

準備段階はこれで終了し、3月中旬には、高島平に隣接する板橋区赤塚地域の区民農園参加者に対する棚田オーナー募集の広報を展開します。4月末の田植えから棚田の稲づくりも始まります。

これから中国をはじめアジアでも超高齢社会に突入し、都市と農山漁村の「限界集落化」が進行していきます。そんな中で都市も農山漁村も生きていく道として地域支援型農業が注目されています。この交流活動をそのモデルとしていきたいと思っています。



棚田で談笑する交流参加者

海と田んぼからのグリーン復興の今、そしてこれから

～生態系からの恵みを生かして、人・海・田んぼ そして森のつながりから復興を考える～

東北大学生命科学研究科 中静 透さん

「海」や田んぼの生態系の豊かさや、生物多様性を育む『グリーン復興』を行うことで、農林水産業とともに生きてきた地域が、より着実に、力強く復興すると信じる・・・東北大学がNGOや企業団体に呼びかけて立ち上げた「グリーン復興プロジェクト」には、地域の人、地域の外の人が数多く参加しています。さまざまに展開されている復興プロジェクトの今とこれからについて、プロジェクトの責任者である中静先生にご紹介いただきました。



津波がたんぼに残した瓦礫を人力で片付ける

の日に発表した。

いろいろなバックグラウンドの方が集まり、さまざまな提案が出てきたが、基本的には土木工事中心の復興だけではなく、生態系の持続的利用や、本来の回復力を生かした農林水産業の復興、エネルギーを含む地産地消などを最重視した復興の提案になっている。具体的なことも始めようということで、被害を受けた沿岸生態系回復のモニタ

リングや、湿地の特性を生かした田んぼの復興、地域特有の農作物や生物を利用した産業やエコツーリズム開発なども考えてきた。

生態系は回復するか？

津波の被害を最も強く受けた生態系は、干潟、藻場、海草場などの沿岸生態系である。これらの生態系は、水質の浄化などの機能もあるが、水産資源を涵養する機能も重要である。さまざまな水産生物の餌となる生物が生息しているほか、魚が産卵する場にもなっている。今回の津波によって、干潟や藻場などの海底地形が大きく改変されている。干潟に関しては、震災以前に生物調査が行われていた場所がたくさんあり、こうした場所の震災後の生物をモニタリングすることで、生態系の回復の様子を知ることができる。東北大学の鈴木孝男さんと占部城太郎さんが、ボランティアの方たちとともに、こうしたモニタリングを進めている。

一方で、地震による地盤沈下で干潟のようになってしまう場所もある。もちろん地権者の同意は必要であるが、こうした土地に土砂を入れ、もとに戻すことだけでなく、干潟や藻場として自然再生させることによって水産資源を増やしたり、エコツーリズムの場としたりすることも、復興のオプションとして考えるべきではないだろうか。

田んぼは甦るか？

NPO法人田んぼの岩渕成紀さんをリーダーとするグループは、ふゆみずたんぼでの経験を生かして、津波で被害を受けた水田の瓦礫を人力で取り除き、湛水したあと田植えをして、1年目から収穫までこぎつけた。収穫量が震災前よりも多いというおまけつきである。岩淵さんによれば、心配された塩分は湛水によってほとんど無害となり、逆に津波が運んできた堆積物がイネの生育に大きくプラスしたということである。



収穫されたお米を「福幸米」として販売。売り切れた。

地域の特徴を生かして

また、生態系を利用した復興が模索されている。東北大学の河田雅圭さんは、もともと浦戸諸島での生物調査を行ってきた。それで得たデータを使った、エコツーリズムなどのリソース開発を試みている。また、浦戸諸島は日本の白菜の発祥の地であることがわかり、そうした歴史と地域特有の産物も生かしたツーリズム開発ができないかと模索している。

これから

これらの活動を報告するとともに、復興に関する状況をつかみ、さまざまな連携をするためのミーティングをほぼ定期的に行ってきた。最近打ち出された三陸復興公園の基本理念として、「グリーン復興」というコンセプトが使われており、私たちが協力して生態系の力を利用した復興を進めたいと考えている。

きっかけ

東日本大震災が起こって早くも1年、それを振り返る報道などを見ていると、改めて災害の大きさを思い出す。東北大学生態適応GCOEでは、それまで生態系や生物多様性の重要性を主張し、企業やNGOの方々とともに持続的な生態系の利用を考えるコンソーシアムを結成してきた。災害の直後は、言葉をなくす現実の前に無力さを感じかけていた。しかし、このコンソーシアムの仲間と実際に被災地を見て、私たちができることは何かを議論する中で、この地域の復興には生態系の持続的利用という視点が欠かせないことに気づき、同意していただける方々とともに「海と田んぼからのグリーン復興プロジェクト」を始めることにした。

やってきたこと

今回、津波で大きな被害をうけた三陸海岸や仙台湾という地域では、その生活や産業、文化に海の恵みが最大限に利用されてきた。そして、海の恵みは、川を通じて山、森、そして田んぼとつながり、それらがこの地域の魅力ともなっている。この地の農林水産業が享受すべき将来の生態系からの恵みを見据え、海や田んぼの生態系の豊かさや、生物多様性を育む「グリーン復興」を行うことで、復興がより着実で力強くなると考えた。これを「グリーン復興宣言」として、5月22日の生物多様性

